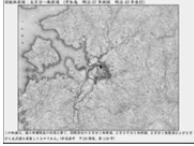


整理番号	愛震 1	愛南町の安政南海地震津波来襲記録		
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場 所	愛媛県南宇和郡愛南町深浦および御荘、貝塚、岩木、満倉			
見所・アクセス	宇和島から国道 56 号で愛南町に向かい、僧都川に架かる橋の手前、八幡神社の約 100m 当たりが、安政南海地震津波の来襲記録が残る平城村貝塚です。さらに 400m 先の第 40 番札所がある御荘平城 300m 先の愛南警察署前は、津波が遡上した和口川と僧都川の合流点付近です。 国道 56 号をさらに南に行った交差点を右折してトンネルを抜けると深浦集落に出ます。海岸沿いに東に入り江の奥に向かうと満倉川の河口に岩木集落が、その少し上流に満倉集落があります。また安政南海地震津波が最も大きかったとされている久良集落は、御荘平城から県道 297 号を南下し約 3km 行く地点にあります。			
写真・図	 安政津波で死者が出た深浦(旧城辺町)の様子 写真 1  安政南海地震の愛南町の津波来襲位置図 写真 2  津波が遡上した和口川と僧都川の合流点付近の様子 写真 3  安政津波が来襲した貝塚(旧御荘町)の様子 写真 4  避難場所(満倉川)から岩木集落(旧城辺町)の様子 写真 5  満倉橋からの満倉集落(旧一本松町)の様子 写真 6  避難場所(久良小学校)からの久良集落(旧城辺町)の様子 写真 7  後継夜が広がる久良湾の様子 写真 8  愛媛県内各地の津波被害状況 写真 9  愛南町総合防災マップ平成27年3月(津波一巻)の地図 写真 10			
解説文	安政南海地震は安政元年(嘉永 7 年) 11 月 5 日(1854 年 12 月 24 日)に発生し、紀伊半島から九州地方にかけて震度 V 以上、震源に近い高知・徳島などでは震度 VI の揺れが推定されています[宇佐美(2003)]。この地震に伴う津波により、現在の愛媛県愛南町南端に位置する旧城辺町深浦(写真 1)では、死者が出ています。 この深浦の被害記録の元になった愛南町正木の蔵岡(わらびおか)家の「蔵岡家文書」の史料などから、弘瀬冬樹、中西一郎が論説「1854 年安政南海地震による愛媛県最南端(愛南町)での地震動・津波被害・地下水変化」(地震第 2 輯第 68 巻(2015))の中で、写真 2 の地図を示し、嘉永 7 年(安政元年)(1854 年)に起きた大地震の記録(現代訳)から、愛南町海岸域の津波来襲位置と新田被害を次のように記述しています。 (次ページへ続く) →			

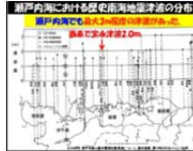
	(前ページより続く) → 『海辺には津波が来た。外海浦の内、深浦、岩木、平城村貝塚、満倉の入り口のどこも流された家があった。新田のところは残らず海になり、大破した。和口川が僧都川と合流する所まで海水が来た』という描写がある。深浦、岩木、貝塚、満倉の入り口の位置を Fig 7 に示す。満倉の入り口（満倉口）の位置は厳密には特定できないが、旧一本松町の海岸線が 120m（すなわち満倉橋から 120m 内陸）であること[一本松町史編集委員会（1979）]を根拠として津波来襲位置を決めた。津波は和口川と僧都川の合流点（Fig 7 の赤丸）まで遡上した。津波は現在の河口から 1km 以上も浸入したことになる。新田は地震による地盤沈下または地震・津波による堤防の決壊、もしくはその両方の効果で海になったのであろう。なお 1960 年チリ津波は、御荘湾に浸入し、差引き 4m を越す潮位変化により湾一帯が被害を受けた。特に真珠養殖の被害が大きかった[御荘町史編集委員会（1970）]。この時も津波は僧都川を遡上した[愛南町役場（2013、私信）]。』この記述で示された旧御荘町と旧城辺町の津波来襲位置を写真 2 の図に示す。旧御荘町の津波が遡上した和口川と僧都川の合流点付近の状況を写真 3 に、貝塚を写真 4 に示す。また旧城辺町の岩水の海拔 20m の避難場所からの集落の様子を写真 5 示す。旧一本松町の満倉橋からの満倉集落の状況を写真 6 に示す。 村上仁士ら（自然災害科学 J. JSNDS15-1、1996）の四国沿岸での歴史津波の津波高によれば、安政南海地震津波の愛南町の津波高は、岩木 3.5-4m、満倉 2-3m、深浦 3-4m、久良 4-5m、貝塚 2-3m と報告されています。写真 7 に愛南町で最も津波高が高い久良の避難場所の久良小学校からの久良集落の状況を、写真 8 に養殖筏が広がる久良湾の様子を示す。 参考までに想定南海トラフ巨大地震の最大津波浸水深さが示された御荘市街地と深浦～敦盛の愛南町総合防災マップ（平成 27 年 3 月）を写真 9、10 に示す。
--	--

得られる 教訓	愛南町の海岸部は、入江や湾に富む海岸地形を呈しており、歴史地震津波で大きな被害を受けて来ている。今日、沿岸域の発展や養殖等、沿岸域の活用も活発化しており、津波の被害ポテンシャルが大きくなっていることを教えます。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	愛震 2	宇和島(宝永津波、城下の馬場先に達し)							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	愛媛県宇和島市丸之内 1 丁目								
見所・アクセス	宇和島では、宝永地震の津波が城下まで達し、当時の海沿いにあった浜屋敷、元結木、佐伯町付近では床上 5 尺（1.5m）程度浸水しました。 現在、宇和島城や郷土館から当時の城下町を見ることができます。								
写真・図	 写真 1 写真 2 写真 3 写真 4								
解説文	1707 宝永地震報告書（平成 26 年 3 月）p53 によれば、「愛媛県の津波被害は、愛媛県の佐田岬を境に北側の瀬戸内海沿岸と南側の四国西部沿岸に大別でき、瀬戸内海沿岸は津波記録がほとんど残されておらず、内海のため津波の被害は高知・徳島両県と比較して少ない。豊後水道に面した佐田岬の半島の南側の宇和島や吉田では、津波高は 5m にも達した一方、瀬戸内海沿岸の西条や高松では、津波高は約 2m となっている。宇和島では、津波は城堀より城下の馬場先に達し、当時の海沿いにあった浜屋敷、元結木、持筒町、佐伯町付近では床上 5 尺（1.5m）にも浸水した。各地点の地盤高は 2m 前後であり、津波高は 3 - 4m と推定できる。一方、現在の街区は大半が埋立により拡大された標高 5m 以下の土地であり、浸水による津波被害を受けやすくなっていることに注意すべきである」とされており、四国沿岸域に来襲した南海地震津波の津波高分布図（写真 4）が示されています。								
得られる教訓	宝永地震当時の地名などから宇和島城下が津波で大きな被害を受けたことや津波高が推定できることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	愛震 3	瀬戸内海の昭和南海地震津波の浸水							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	愛媛県大洲市長浜甲								
見所・アクセス	昭和の南海地震で大洲市長浜まで津波が来襲し浸水したという、当時、学生であった人が体験した貴重な記録であります。瀬戸内海沿岸の低地に被害があったという、稀な記録です。長浜で浸水した場所は肱川河口の新長浜大橋の右岸海側の低地です。								
写真・図	 写真 1  写真 2								
解説文	昭和の南海地震では、津波により太平洋沿岸で甚大な被害が発生しました。津波は佐田岬を回り込み瀬戸内海沿岸にも来襲しましたが、その記録は多くありません。これは、愛媛県大洲市長浜で津波の浸水の様子を当時学生であった人が記録した貴重な記録です。 四国防災 88 話の第 60 話の瀬戸内海の津波には、「昭和 21 年 12 月 21 日の午前 4 時過ぎ地震が発生しました。汽車で松山へ通学していた私は、いつも起きる 4 時過ぎに玄関へ出てみると、家の前には潮がさしっていて水深さ 30～50cm はありました（中略）学校から帰って一人で歩いて痕跡調査をしました、町のあちこちに潮が来ていたことがわかりました。氷屋の証言から長浜港沿岸にも潮が上がったことがわかりました。」と体験者が語れています。しかし、この証言も 4 時過ぎに玄関へ出てみると潮がきていたというのは、地震発生から長浜までの津波到達時間を考えれば疑問が残ります。 昭和 24 年度現在に於ける四国地方の地盤変動量分布、写真 2 の図には、長浜 28cm 地盤沈下となっており、地震直後の地盤沈下はもう少し大きかったと推定されることなどから、この浸水は地盤沈下によるものかもしれません。学校から帰ってから町のあちこちに潮が来ていたことや氷屋の証言の長浜港沿岸にも潮が上がったのは、津波によるものと考えられます。								
得られる教訓	昭和 21 年の南海地震は、太平洋沿岸には大きな津波被害をもたらしましたが、瀬戸内海沿岸にも津波で低地に被害があったことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで		平成以降		

整理番号	愛震 4	砥部衝上断層							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	愛媛県伊予郡砥部町岩屋口								
見所・アクセス	砥部川河床に断層露頭があります。ここが中央構造線の砥部時階の模式地となっており、国の天然記念物に指定されています。 伊予鉄道・松山市駅から伊予鉄バス断層口行きで50分、断層口下車、徒歩5分。露頭にある衝上断層公園は、国道379号に接しており、付近は駐車場も備えた公園として整備されています。								
写真・図	     写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5								
解説文	愛媛県砥部町岩谷口には、中央構造線の露頭（写真1）があります。昭和13年に国の天然記念物に指定されています。断層露頭は、砥部川河床（写真2）にあります。 砥部町のホームページには、「町内には、日本列島を横断する中央構造線が走（はし）っています。中央構造線上に約6500万年前の古い地層が、約4000万年前の新しい地層の上に乗りに上げた、珍しい逆断層があり、砥部川により洗い出され露出しています。この逆断層を、「砥部衝上断層（しょうじょうだんそう）」といい、昭和13年に国の天然記念物に指定されました（写真3）。地質学上貴重であり、県内外から多くの人が訪れています。この断層周辺の約200メートルを親水公園として整備したのが「衝上断層公園」です。公園の中央には、つり橋が架かり、対岸へ渡ることができます。一帯には、ベンチやあずま屋、藤棚がある休息所や遊歩道などがあり、憩いのスペースになっています。」と写真2とともに紹介されています。 詳しくは愛媛大学榊原正幸教授が四国の地盤88箇所59番の中で、写真4、5の資料のように紹介されています。								
得られる教訓	中央構造線上で、約6500万年前の古い地層が約4000万年前の新しい地層の上に乗りに上げた珍しい逆断層が発生したことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

整理番号	愛震 5	宝永津波の被災伝承がある碇神社跡							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	愛媛県西条市明神木								
見所・アクセス	四国の瀬戸内海沿岸中央部に位置する西条市に宝永津波で被災したとされる神社の記録があります。それは渦井川沿いの明神木地区にある旧碇神社です。 旧碇神社は、県道 139 号線から玉津小学校横の道路を南に 400m 行った所の小川に架かる橋を渡り小川沿いに西 100m 行った田畑の中にあります。								
写真・図	   写真 1 写真 2 写真 3								
解説文	愛媛県では、四国の瀬戸内海沿岸中央部に位置する西条市に宝永津波で被災したとされる神社の記録があります。それは室川の河口近い玉津地区にある碇神社（写真1）です。 加藤正典、明神木の歴史と碇神社、伊予西条の歴史一考察（2001）によると、現在の碇神社所蔵の棟札には「宝永四年(1707) 十月四日大地震以後高汐満就中宝永五年八月三日大洪水高汐社中迄上揚砂尺余段々及大破今年新造営干時正徳二年(1712) 九月八日御遷宮」と記されています。宝永地震を受けた翌年、この地は洪水と高潮に見舞われ、社地まで浸水し、打ち上げられた砂で 30cm も埋まり大破したため、新たに造営したことが記されています。 「西条誌」稿本(下書き)天保十三年（1842）の「明神木村」の項にも「宝永の高潮に破損し今の処に移る。」とあります。西条市明神木の干拓でできた低地にあった碇神社は、宝永地震の地震動により地盤沈下し、その翌年の高潮で社殿が浸水したため、社殿が移されたか、あるいは、この宝永地震により地盤沈下した後、津波に襲われ、さらに翌年の高潮による水害がもとで社殿が潮に浸かったため、碇明神の社が遷されたのかは明確ではありません（写真2）。 瀬戸内海における歴史南海地震津波の分布（山本尚明：瀬戸内海の歴史南海地震津波について、歴史地震、第 19 号(2003)）（写真3）によると、瀬戸内海でも最大 3m 程度の津波があったこと、宝永津波で西条は 2m の津波があったと推定しています。その宝永津波か翌年の高潮の被災を受けたとされる旧碇神社跡には、現在、小さな祠と石碑が建立されています。								
得られる教訓	宝永の高潮に破損し今の処に移る。という被災伝承がある碇神社跡は、宝永地震津波であった可能性が高いことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降